

2 名古屋市の歴史的資源

(1) 文化財の分布状況

① 指定・登録文化財

名古屋市には、国、愛知県、名古屋市の指定文化財が総計 360 件（平成 24 年 9 月 6 日現在）存在している。その内訳は国指定 133 件、県指定 107 件、市指定 120 件である。指定文化財のうち、有形文化財が 289 件で半数以上を占め、うち建造物は 48 件が指定されている。次に多いのは民俗文化財で 50 件である。記念物と無形文化財は件数が少なく、それぞれ 19 件と 2 件ある。指定文化財の他に登録文化財が 74 件ある。（平成 24 年 8 月 13 日現在）

【指定区分別】（平成 24 年 9 月 6 日現在）

区 分	件 数
国指定文化財	133 件（うち建造物 9 件、記念物 8 件）
県指定文化財	107 件（うち建造物 12 件）
市指定文化財	120 件（うち建造物 27 件、記念物 11 件）
計	360 件

【種別】

*登録文化財：74 件（平成 24 年 8 月 13 日現在）

区 分	件 数
有形文化財	289 件（うち建造物 48 件）
記念物	19 件（うち史跡 12 件）
無形文化財	2 件
民俗文化財	50 件
計	360 件

【指定文化財一覧表】（平成 24 年 9 月 6 日現在）

種別	有形文化財							無形文化財		民俗文化財		記念物			合計
	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡・典籍	考古資料	歴史資料	芸能	工芸技術	有形	無形	史跡	名勝	天然記念物	
国指定	9	16	5	41	53	1	0	0	0	0	0	6	1	1	133
県指定	12	17	9	40	17	6	4	0	0	0	2	0	0	0	107
市指定	27	11	5	9	0	3	4	2	0	38	10	6	1	4	120
合計	48	44	19	90	70	10	8	2	0	38	12	12	2	5	360

(ア) 国指定文化財

名古屋市に残る国指定文化財 133 件の内訳は、有形文化財（国宝、重要文化財）125 件（建造物 9 件、絵画 16 件、彫刻 5 件、工芸品 41 件、書跡・典籍 53 件、考古資料 1 件）、記念物 8 件（史跡 6 件、名勝 1 件、天然記念物 1 件）である。

○有形文化財（国宝、重要文化財）

建造物としては、名古屋城（西南隅櫓、東南隅櫓、西北隅櫓、表二の門）、名古屋城二之丸大手二之門、名古屋城旧二之丸東二之門、^{とべ}富部神社本殿、観音寺多宝塔、竜泉寺仁王門、興正寺五重塔、旧名古屋控訴院地方裁判所区裁判所庁舎、名古屋市東山植物園温室前館があり、いずれも名古屋の歴史と文化を代表する建築物である。

絵画としては、狩野派により描かれた名古屋城旧本丸御殿障壁画、地蔵院の絹本著色騎馬武者像（伝足利尊氏像）がその代表的なものである。



写真 1-11 名古屋城旧本丸御殿障壁画（部分）

彫刻としては、熱田神宮の木造舞楽面、^{かんのんぼさつざうおよび せいしぼさつ}七寺の木造観音菩薩坐像及勢至菩薩坐像、^{ざざう}長母寺の木造無住和尚坐像などが指定されている。

工芸品としては、^{らいくにとし}国宝の短刀銘来国俊を含む熱田神宮の刀剣類や古神宝類をはじめ、^{こせとおうゆうぎよはもんへい}刀剣類が多く指定されているほか、古瀬戸黄釉魚波文瓶のような焼きものも指定されている。

書跡・典籍としては、^{けんゆ}国宝古事記賢瑜筆などの国宝 4 件を含む宝生院の書跡をはじめ、名古屋市蓬左文庫や熱田神宮などの書跡が指定されている。

考古資料としては、^{け さだすきもんどうたく}袈裟襷文銅鐸がある。

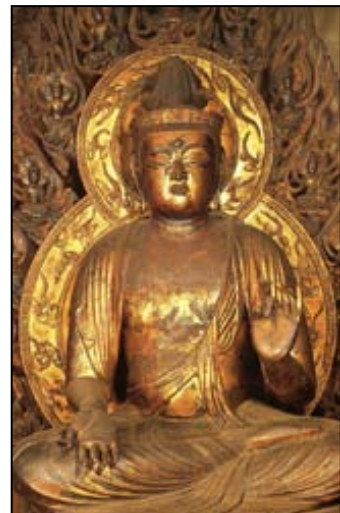


写真 1-12 木造勢至菩薩坐像

○記念物

史跡としては、特別史跡名古屋城跡や東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳をはじめ、大曲輪貝塚、白鳥塚古墳、八幡山古墳、大高城跡がある。名勝としては、名古屋城二之丸庭園、天然記念物としては、名古屋城のカヤがある。



写真 1-1 名古屋城二之丸庭園

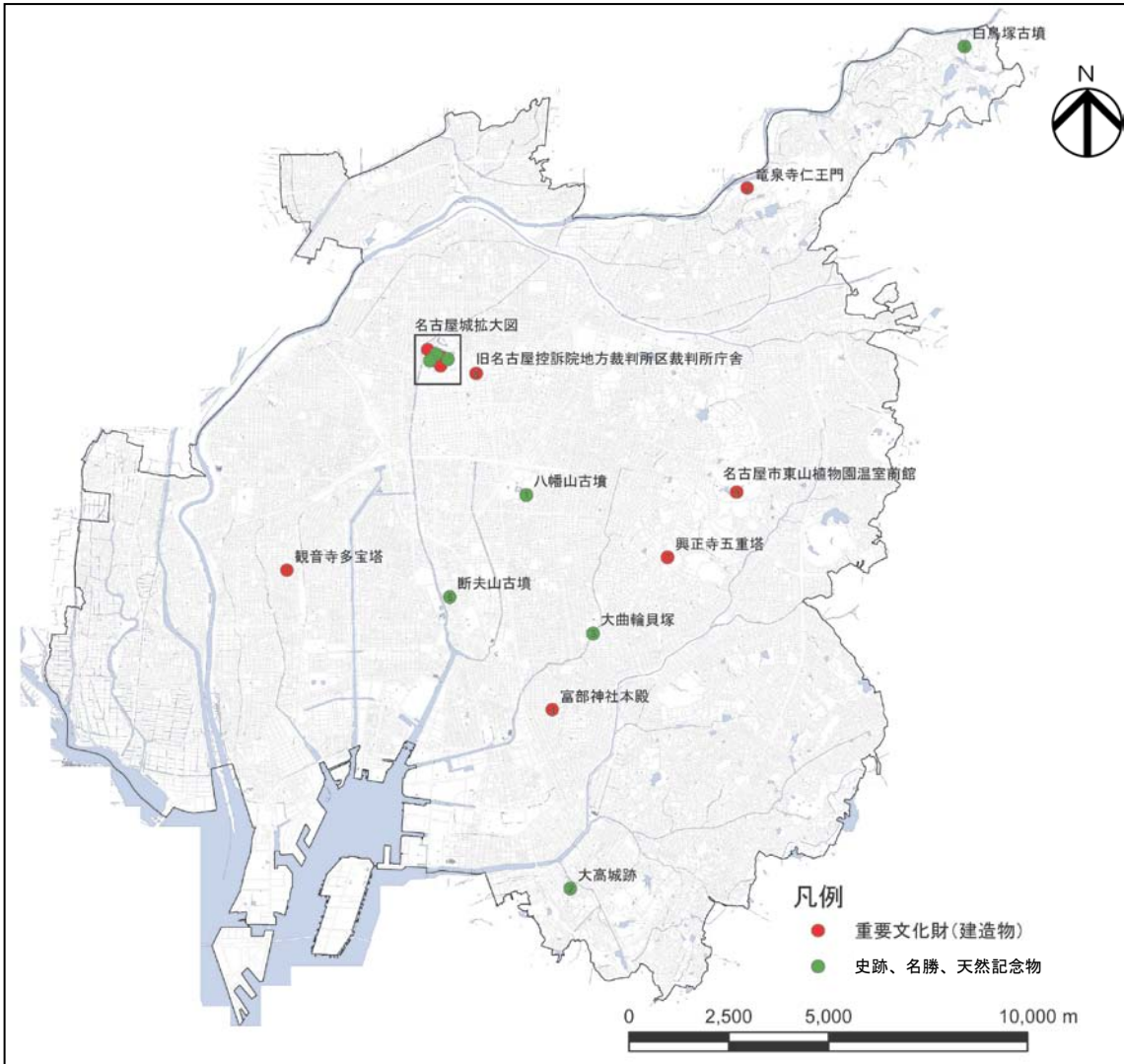


図 1-18 名古屋市内の重要文化財等

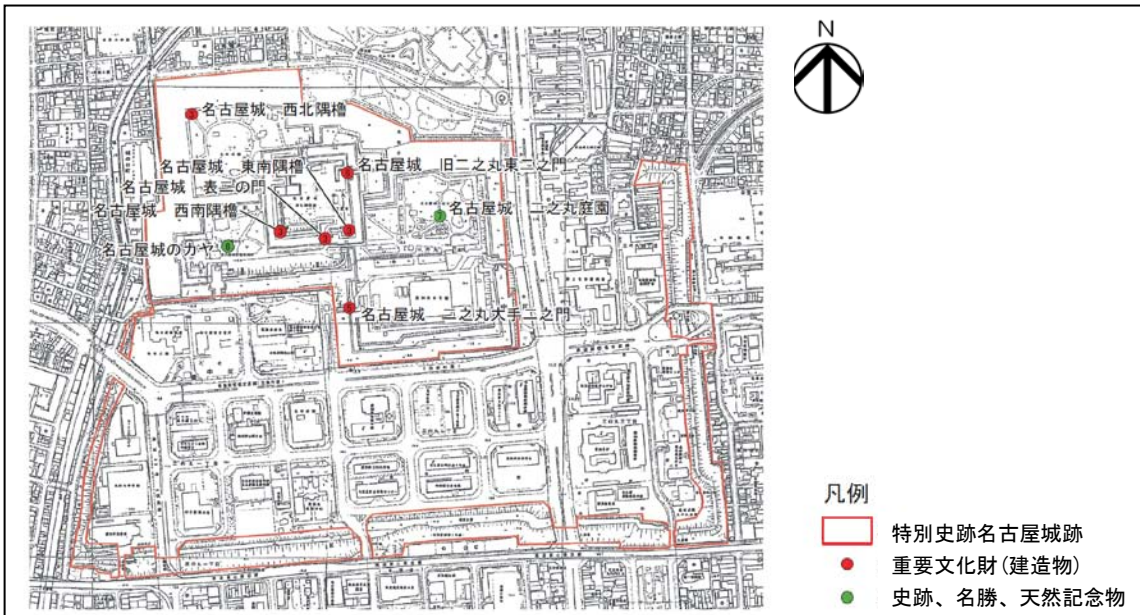


図 1-19 名古屋城内の重要文化財等

(イ) 愛知県指定文化財

名古屋市に残る愛知県指定文化財 107 件の内訳は、有形文化財 105 件（建造物 12 件、絵画 17 件、彫刻 9 件、工芸品 40 件、書跡・典籍 17 件、考古資料 6 件、歴史資料 4 件）、無形民俗文化財 2 件である。

○有形文化財

建造物としては、東照宮社殿、瑞泉寺総門、建中寺徳川家霊廟、無縫塔(長慶寺)、日泰寺奉安塔、草結庵、暮雨巷、服部家住宅、旧藤山家住宅日本家、旧渡辺家書院及び茶室、伊藤家住宅、服部幸平家住宅・倉がある。



写真 1-14 旧渡辺家書院及び茶室

絵画としては、旧清須城障壁画や狩野常信作の織田信長公画像などがある。

彫刻としては、栄国寺の木造阿弥陀如来坐像や聖徳寺の木造聖徳太子立像、熱田神宮の神事面などがある。



写真 1-15 木造阿弥陀如来坐像(栄国寺)

工芸品としては、熱田神宮の刀剣類のほか、笠覆寺の梵鐘や灰釉魚波文四耳壺などが指定されている。

書跡・典籍については、織田氏側近資料を多く含む尾張円福寺文書や足利義教連歌会記録である永享四年連歌懐紙などがある。

考古資料としては、慶応 3 年(1867)に熱田神宮に奉納された鉄地金銅張馬具(古墳時代)などがある。



写真 1-16 鉄地金銅張馬具
(写真提供：熱田神宮)

歴史資料としては尾張国絵図や三河国絵図、尾張藩領産物帳などがある。

○民俗文化財

無形民俗文化財としては、尾張や西三河地方に伝わる民間武術の一種である棒の手(桜の棒の手、守山の棒の手)が指定されている。

(ウ) 名古屋市指定文化財

名古屋市指定文化財 120 件の内訳は、有形文化財 59 件（建造物 27 件、絵画 11 件、彫刻 5 件、工芸品 9 件、考古資料 3 件、歴史資料 4 件）、無形文化財 2 件（芸能 2 件）、民俗文化財 48 件（有形 38 件、無形 10 件）、記念物 11 件（史跡 6 件、名勝 1 件、天然記念物 4 件）である。

○有形文化財

建造物としては、富部神社祭文殿及び廻廊、建中寺総門、丹羽家住宅、揚輝荘聴松閣など様々な時代、種類の建造物が指定されている。

絵画としては、興正寺の梨木禽鳥図屏風、性高院の絹本著色松平忠吉像などがある。



写真 1-1 梨木禽鳥図屏風(興正寺)

彫刻としては、成願寺の木造十一面観世音菩薩立像、龍潭寺の木造如来仏頭、興正寺の木造観音菩薩立像などがある。

工芸品としては、願王寺の刺繍涅槃図、擬宝珠（旧裁断橋所用）などがある。



写真 1-2 催馬楽桜人

考古資料としては、桜田貝塚出土の魚形土器、大須二子山古墳出土品がある。

歴史資料としては、江戸時代の俳人である横井也有関係資料や日本で最初の理学博士となった伊藤圭介関係資料などがある。

○無形文化財

無形文化財としては、催馬楽桜人（雅楽）と志野流香道がある。

○民俗文化財（有形・無形）

有形民俗文化財としては、市内各所に残るからくりを乗せた山車（19 輛）や馬の塔の馬標・馬具などが指定されており、無形民俗文化財としては、棒の手や祭礼、祭囃子、木遣り音頭、筏師一本乗りなどが指定されている。

○記念物

史跡としては、白鳥第1号墳、千鳥塚、名勝
としては、旧「年魚市瀉」展望地、天然記念物
としては、村上社のクスノキなどがある。



写真 1-19 白鳥第1号墳

(エ) 登録文化財

登録有形文化財 73 件、登録記念物 1 件が登録
されている。

登録有形文化財としては、帝冠様式の名古屋市役所本庁舎や愛知県庁本庁舎
などの近代建築をはじめ、寺院、料亭、醸造所など多様な建造物が登録されて
いる。

登録記念物としては、明治 42 年（1909）開園の鶴舞公園が登録されている。

県・市指定文化財

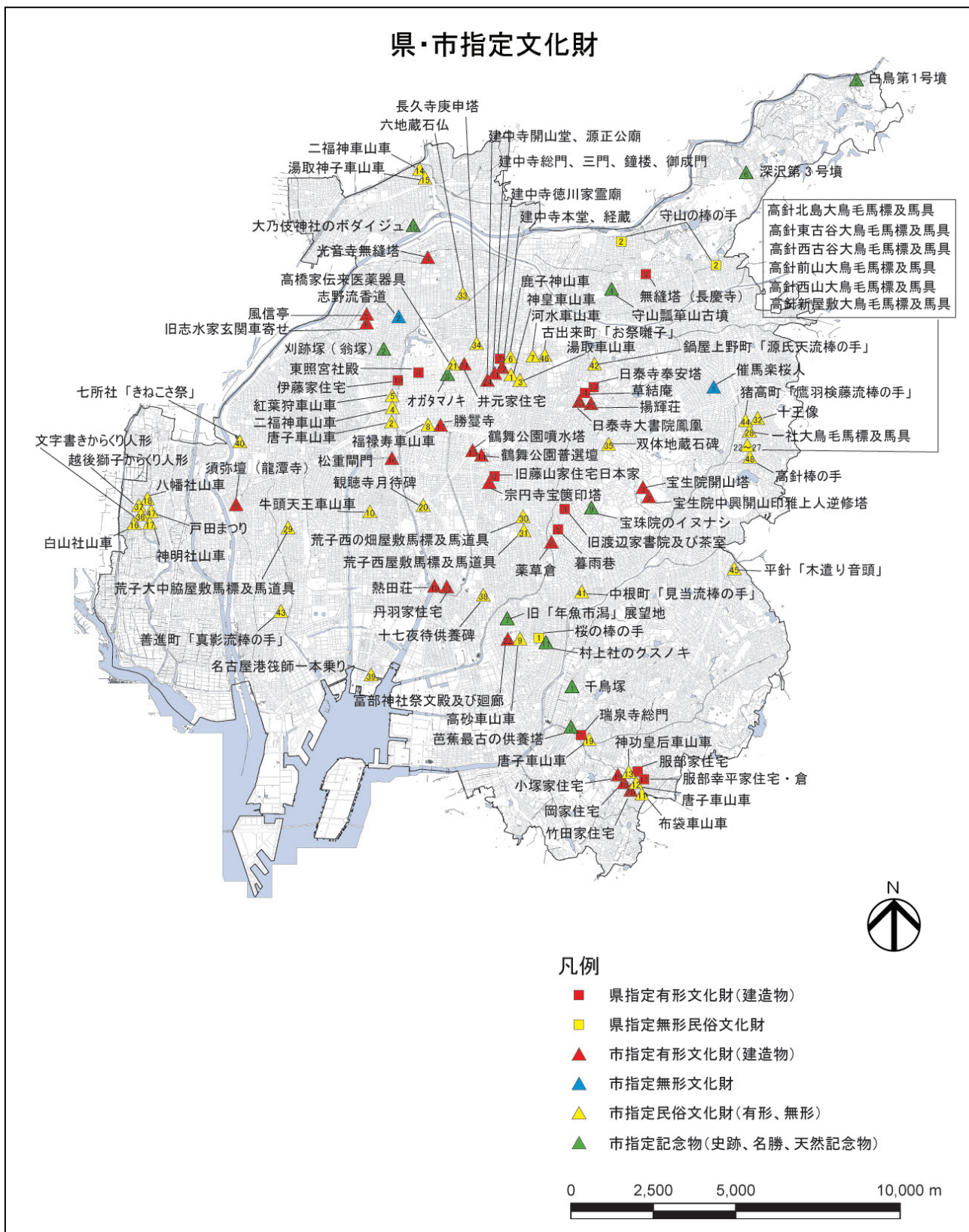


図 1-1 県・市指定文化財(国指定以外)の分布図(美術工芸品は除く)

国登録文化財

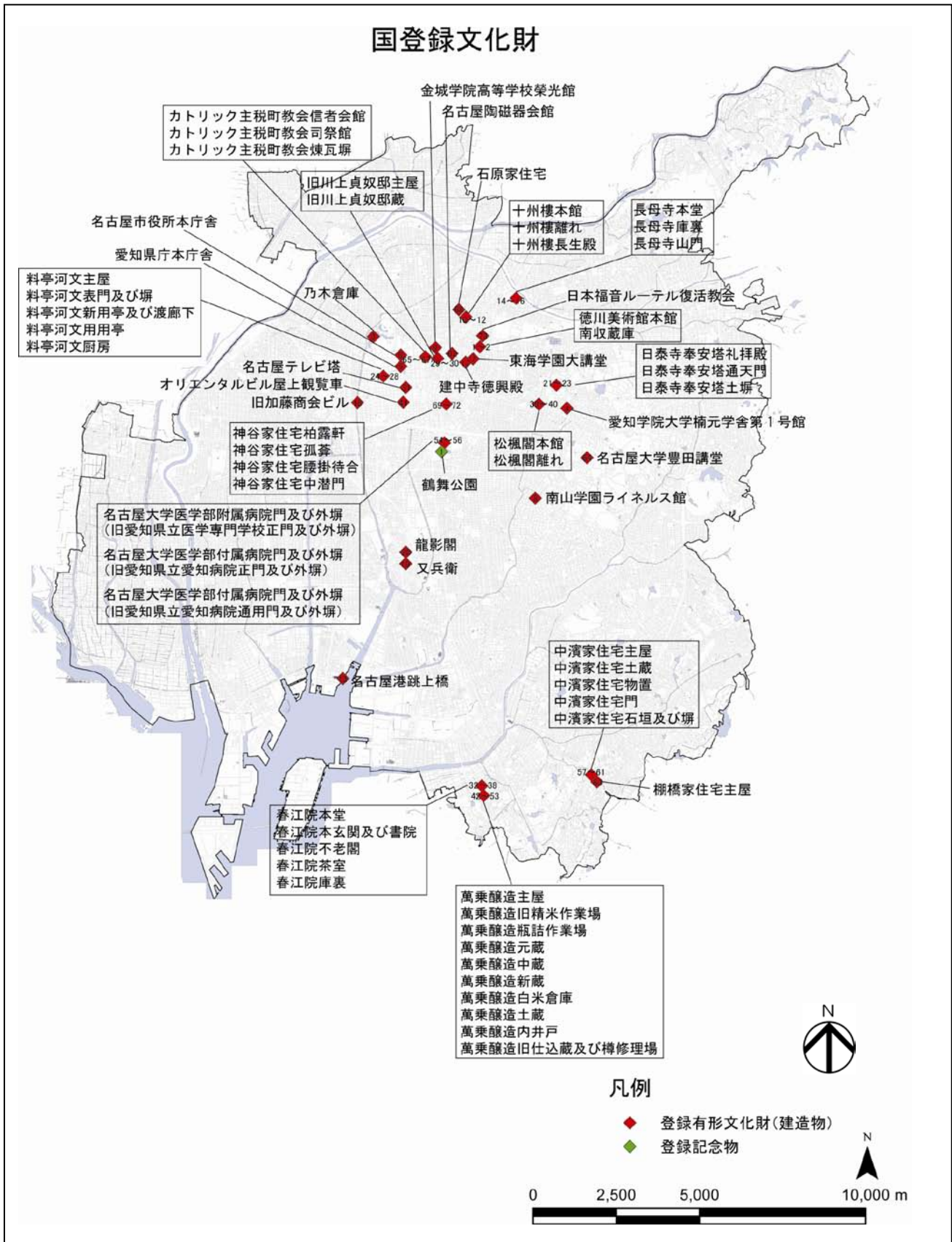


図 1-21 登録文化財の分布図(建造物・記念物)

② 埋蔵文化財

名古屋市域は、東部の丘陵地、中央の洪積台地、洪積台地をとりまく沖積平野から成っており、古くからの集落は、洪積台地の辺縁を中心に営まれている。

瑞穂区、熱田区、南区、緑区などでは、縄文時代から弥生時代の遺跡が多く分布している。台地部から東部丘陵地には、古墳が多く残り、なかでも守山区の志段味地区や龍泉寺周辺には様々な時期の古墳が集中している。東部丘陵地を含む千種区、昭和区、緑区、天白区、名東区などは、古代から中世にかけて須恵器や施釉陶器の一大産地であった猿投窯の一部を形成していた地域にあたり、古窯跡が非常に多く分布している。

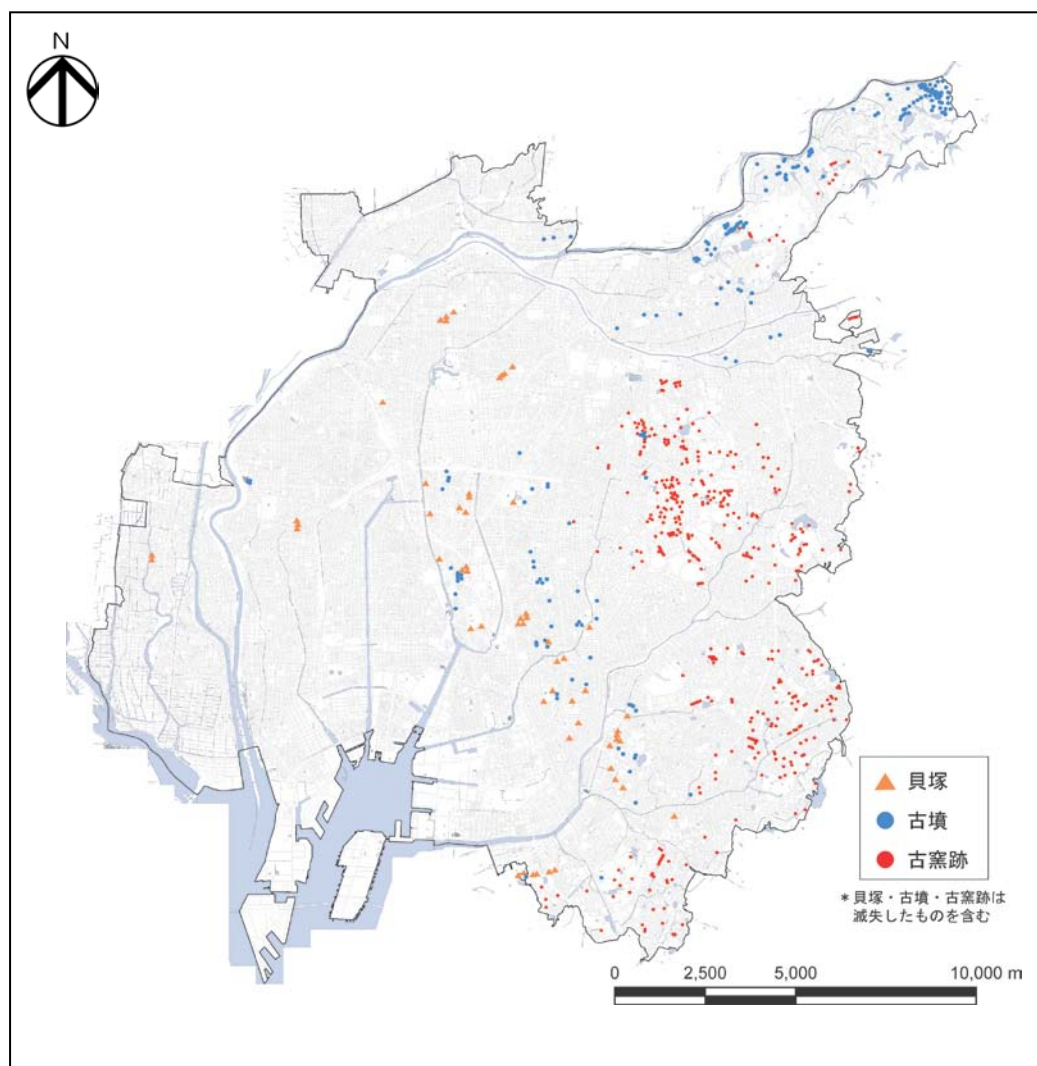


図 1-22 埋蔵文化財分布図

【コラム】徳川美術館の文化財

2代藩主光友が大曾根屋敷として造営し、明治時代、尾張徳川家の別邸として使用された地は、現在、徳川園として整備公開されている。

徳川園の一角に立地する徳川美術館は、昭和10年(1935)、徳川黎明会によって開設されたもので、尾張徳川家に伝えられた数々の「大名道具」をそのまま収蔵し、展示・公開している他に例を見ない美術館である。

収蔵品は徳川家康の遺品を中心に藩祖義直以下歴代藩主とその家族の遺愛品1万数千件に及ぶ。その中には、武家のたしなみとして重んじられた茶の湯に関する収蔵品も多い。「紙本著色源氏物語絵巻」をはじめ国宝9件、重要文化財59件を含み、徳川美術館ならではの豊富さ、質の高さ、そして保存状態のよさを誇っている。



写真 1-21 婚礼調度類(国宝)
(徳川光友夫人千代姫所用)



写真 1-20 紙本著色源氏物語絵巻(国宝)

(2) 名古屋の歴史と伝統を反映した人々の営み

①祭り

名古屋では、疫病から逃れ、無病息災を祈る^{ごずてんのう}牛頭天王を祭神とする天王信仰が最も身近なものであった。なかでも、那古野神社（旧三之丸天王社、中区）、洲崎神社（旧天王崎天王社、中区）、南新宮社（熱田区）、富部神社（旧蛇毒神天王社、南区）などは、江戸時代から著名な神社であった。これらの神社では、提灯を飾った山車や^{まきわら}巻藁船などを出す天王祭が行われてきた。この他、筒井町（東区）や八坂神社（西区）でも天王祭が盛んに行われている。また、市内で散見される屋根神にも津島社（天王社）が祀られており、天王信仰は市内の広範囲に展開している。名古屋の祭りの特徴である山車もこの天王祭の中で始まったものである。

名古屋の山車祭礼と山車に搭載されたからくり人形は、日本の中でも独自の発展を遂げただけでなく、広く普及した。『名古屋市文化財報告書X』によると市内には44輛の山車があり、現在19輛が市指定文化財となっている。現在の市域で山車が出た早い例は、熱田の南新宮社の祭りで、文明年間（1469～1487）にさかのぼるといふ。熱田では昭和時代まで、^{おおやま}大山と^{だんじり}車楽という2種類の古い様式の山車が出された。これらの山車は、名古屋城築城以前から行われていた祭りに特徴的なもので、同じく名古屋城よりも古い歴史を持つ（三之丸）天王社の祭りにも車楽が出された。一方、名古屋城下町で発展した山車は名古屋型と呼ばれるもので、名古屋の山車の特徴であるからくり人形を乗せることを前提とした山車である。

市内に現存する山車の多くは、名古屋型である。車楽は、那古野神社や富部神社にわずかに残るのみであり、大山は既に消滅してしまった。



写真 1-23 名古屋型山車
(若宮八幡社の福祿寿車(市指定文化財))



名古屋市博物館蔵
写真 1-22 車楽(復元)



写真 1-24 大山
昭和10年(1935)

市内に最も多く残る名古屋型の特徴は、以下のとおりである。二層造りで唐破風の屋根を細い四本柱で支え、その四方は吹き抜けになっており、二層目の正面に一段下がった前棚を備え、中央を開けて高欄で囲む。四本柱内に主役のからくり人形、前棚には磨振人形などの前人形を載せる。木組みの周囲は大幕で囲い、高欄下には細長い水引幕をかける。車輪は一木四輪の外輪で、人を巻き込まないように、格子状の輪掛を取り付け、その上へ楫棒が地面と平行に車体本体の前後に伸びている。屋根は四本柱を土台に固定し、山車内部のセリ上げを使い、綱を操作することによって屋根の上げ下げを行う。この名古屋型は、東照宮祭、若宮祭に出される山車をはじめ、三之丸天王祭の見舞車などに採用された。現在、若宮八幡社に残る福祿寿車や東区の筒井町・出来町、中村区の広井神明社に残る山車などに見ることができる。

山車は城下町のほか、東海道などの街道に形成された町の祭礼でも曳かれた。熱田を除くと、緑区鳴海や同区有松などがその代表例である。

鳴海の山車は 9 輛あり、鳴海八幡宮に属する 5 輛は、からくり人形を乗せた相原町の山車が名古屋型である以外は、単層の囃子台であり、名古屋ではここだけに見られる山車形態である。成海神社に属する 4 輛は、二層構造である点は名古屋型と変わらないが、車輪や前壇とよばれる台のある構造に知多型の古い山車様式を残している。

有松には 3 輛の山車がある。西町では明治 6 年（1873）年に名古屋型の山車を製作しており、中町と東町の山車は、他地域で曳かれていた名古屋型の山車を買って求めたものである。

山車はかつて農村であった場所でも、各地域の天王祭や豊作の時に曳き出された。中川区戸田、同区牛立、西区比良、守山区大森、南区本星崎、同区戸部などである。瑞穂区井戸田には大山があったが、戦災で焼失した。山車の形態は、南区戸部が車楽である他は名古屋型である。

中川区戸田では、笠鉾の祭りであったものを寛政 8 年（1796）に山車祭りに変更した。一之割から五之割までの地区に五輛の山車が残されている。これらは、様式的には名古屋型の山車であるが、農村らしい素朴な素木造りである。

中川区牛立と守山区大森では、地元の天王祭に山車を曳いた。牛立の山車は江戸時代末期に志水八王子社の祭車を譲り受けたものである。西区比良でも本来は地元の天王祭に山車が曳かれていたが、現在は隔年秋に曳き出されている。

名古屋型の山車の特徴であるからくり人形の製作技術は、享保 18 年（1733）に京都から名古屋に来た玉屋庄兵衛などの人形師により発達した。現在は、尾陽木偶師 9 代目玉屋庄兵衛が、江戸時代から続く技を伝えている。



図 1-23 名古屋市内の山車・神楽の分布図

農村部の祭礼では、町方の山車に対して、神楽屋形が出されることが多かった。『名古屋市文化財報告書X』によると市内には 74 基の神楽屋形がある。これらは伊勢太神楽の影響を受けたもので、神体の獅子頭を納める屋形が様々に装飾され、それに太鼓をつけて、竹を細く削ったばちで叩く。

中川区下之一色には、南ノ切、東ノ切、西ノ切、中ノ切の 4 基の神楽屋形が残る。これらは、江戸時代後期のほぼ同時期に造られたものであり、類似性がある。二年に一度 7 月に行われる川祭り（浅間社祭）に曳き出され、祭りを華やかなものとしている。

港区には、小碓町、当知町、新茶屋五丁目、知多二丁目に神楽屋形がある。小碓町の神楽は、寛政年間に近在で製作されたものを明治初年に譲り受けたものである。また、港区当知町の神楽は、名古屋城下の大久保見町の住人鋸屋佐助の作である。新茶屋五丁目の神楽には、「文政庚寅十三歳（1830）」と銘記されており、



写真 1-25 神楽

神楽から派生した男獅子舞も保存会によって継承されている。知多二丁目の神楽は、愛知県知多郡からの移住者が山神社に奉斎したものであり、山神社の祭礼に用いられる。

尾張から西三河にかけて広く分布した馬の塔は、市内では熱田神宮、大須観音、荒子観音、龍泉寺などへ盛んに奉納されていたが、馬を飼うことがなくなため、衰亡していった。馬の塔の警固としてつくことが多かった棒の手は、各種の流派が継承され、今も各所で行われている。

岩塚七所社の「きねこさ祭」は、中世に起源をもつ田遊び・田楽の流れを伝える貴重なものである。市内での農耕は微々たるものになってしまったが、農業に由来する年中行事や五穀豊穰を願う祭礼は所々で行われている。

名古屋市内には、屋根の上や軒下に小さなほこら祠を設けた「屋根神」が多く見られる。屋根神には、津島社、秋葉社、熱田社の神々が祀られ、地域住民の持ち回りで管理されている。西区や中村区に多く分布している。

②伝統文化・芸能

江戸時代、尾張藩では、初代義直や 7 代宗春など歴代藩主の多くが、文化や学問の振興に取り組み、さまざまな文化活動が活発になった。特に茶華道や能など武家のたしなみとされる文化が花開くとともに、町民にも芝居などの文化が広まった。また、狂言、踊りなど幅広い分野の芸能が飛躍的に盛んになり、「芸どころ名古屋」の気風が培われた。

茶道：尾張藩の茶道は、有楽流が主流であったが、12代藩主の^{なりたか}芥莊は、裏千家11代の千玄々齋につき、市内には玄々齋好みの茶室も残る。一方、町人の間では、表千家と松尾流の茶道が盛んであった。名古屋では、江戸期から続く商家はもとより、明治以降の新興商人の大邸宅には、必ずといっていいほど茶室が設けられており、日常的に茶を喫する風習が伝統的に継続してきた。市内各所に残る茶室を利用した茶会が、現在も盛んに行われている。



写真 1-26 茶会の様子

(写真提供：熱田神宮)

香道：名古屋では志野流香道が継承され、無形文化財に指定されている。志野流は、室町時代、志野宗信が足利義政の知遇を受けて、大名、武家にふさわしい香道として創始した。志野流家元の蜂谷宗意が京都から名古屋に移り住み、現在、名古屋を中心に全国に約 200 の教場を設けている。志野流には歴代の家元が考案した多くの「組香」が伝えられ、源氏香、三景香などをはじめ、およそ 250 組の組香が保存されている。

狂言：名古屋の狂言は、慶長 19 年 (1614)、山脇五郎左衛門源助元宜が初代藩主の徳川義直に召し抱えられたことに始まる。この元宜が尾張藩お抱えの最初の能役者となった。元禄 9 年 (1696)、4 代和泉元知の時に京都から名古屋へ移住した。明治時代、名古屋の狂言の伝統を守るため、狂言共同社が結成され今日に至る。

能(笛方)：能楽笛方藤田流の初代藤田清兵衛重政は、寛永 6 年 (1629)、2 代将軍徳川秀忠の仲介により、初代藩主義直に仕えるため京都から名古屋に移住した。4 代藩主の徳川吉通に近侍した近松茂矩の『昔咄』によると、初代藩主義直は小鼓の名手、2 代藩主光友は舞の名手で、その家臣たちも能を習得していたという。現在、藤田流 11 世が、重要無形文化財総合指定保持者となる一方、国内のみならず広く海外でも講演活動などを続けている。

踊り：名古屋では現在も舞踊が盛んで、「在名五流」(赤堀流、工藤流、西川流、^{はなやぎ}花柳流、^{ふじま}藤間流)による舞踊会などが催されている。江戸後期、尾張藩では藤間流の舞踊を学ぶものが多かったが、天保 12 年 (1841)、名古屋に移住した初世西川鯉三郎は、名古屋西川流を創設し独自の世界を築いた。戦後、2 世西川鯉三郎は演劇性を取り入れた「名古屋をどり」を始め、西川流は日本舞踊の大流派と成長して現在に至る。

③伝統産業

名古屋城下町とその周辺では、木曾や飛騨地方の良質な木材、尾張・知多・三河産の綿、古代からの主要産業であった焼き物の伝統などを背景に、高い技術を有する多くの産業が育った。現在、市内に残る伝統産業以外にも旧尾張藩領であった地域には、瀬戸焼・常滑焼・美濃和紙などの伝統産業が残されている。伝統産業は、地域の歴史と風土に根ざしたきめ細やかな「モノづくりの心」を伝え、人々の生活に豊かさと潤いをもたらしている。

尾張七宝：天保年間に、尾張国海東郡の梶常吉がオランダ七宝から銅胎植線施釉を学び、その技法を完成させたのがその始まりとされる。七宝とは、仏典にいう七つの珍宝、金・銀・瑠璃・しゃこ・めのう・真珠・まいえ、のことで、それらをちりばめたような美しい輝きを放つ。



写真 1-27 尾張七宝

和菓子：茶の湯の盛んな名古屋は菓子どころとしても知られている。日本では鎌倉時代、仏教の興隆にともない中国との交流が活発となり、茶の湯とともにいろいろな菓子がつくられ、饅頭、羊羹、羽二重餅、団子など、今日の和菓子を代表するものが生まれた。名古屋の和菓子は京菓子とともに伝統菓子として技法を継承し、日本人のくらしと深く結びついていった。



写真 1-28 和菓子

有松・鳴海絞：名古屋の絞り染めは、今から約400年前の名古屋城築城の際に、九州豊後の人々によって伝えられたといわれている。その後、尾張藩の手厚い保護のもとで急速に発展し、東海道を行きかう旅人に珍重された。



写真 1-29 有松・鳴海絞

名古屋仏壇：今日の仏壇の基礎ができあがったのは、江戸時代中期の宗門改め、壇家制度の確立にさかのぼる。名古屋における仏壇製造の歴史は、元禄8年（1695）、に仏壇専門店「ひろや」が創業したのが始まりといわれている。現在、橘町界隈の本町通り沿いは、仏壇店が軒を連ねる仏壇街となっている。



写真 1-30 名古屋仏壇

名古屋節句人形：名古屋における節句人形の歴史は、寛永年間に始まり、天明年間頃の「名府年中行事」によると、玉屋町と諸町にひな人形市が立っていたことが記されている。明治に入ると東京から職人が招かれ、技術が一段と向上して、全国有数の産地へと成長を遂げた。



写真 1-32 名古屋節句人形

名古屋友禅（手描友禅）：名古屋における手描友禅は、享保年間、7代藩主徳川宗春の遊芸華やかな時代に、京都から絵師・友禅師などが往来して伝えられた。その後、当地に質素儉約の気風が定着し、花鳥風月を基本にした、色使いも単彩濃淡調の渋い友禅染となり、今日に受け継がれている。



写真 1-31 名古屋友禅(手描)

名古屋友禅（型友禅）：型友禅は、友禅模様を型彫りした型紙を下絵の代わりに用い、使う色ごとに型紙を用意して絵柄を付けていく友禅染である。名古屋における型友禅は、その起こりは紺屋での旗や幟などにあると言われ、江戸時代末期には、型友禅の産地基盤を確立した。明治に入ると、京都から新しい技術を導入するなどして、生産が拡大した。

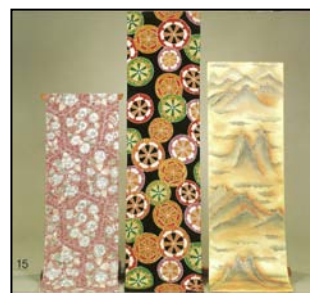


写真 1-33 名古屋友禅(型)

木桶：名古屋では江戸時代、富嶽三十六景「尾州不二見原」に描かれている様に、尾張藩所領の木曾 榎^{さわり}を用いて桶の製造が盛んになった。旧桶屋町には、藩御用達の桶職人が多く住んでいたといわれている。



写真 1-34 木桶

名古屋桐箆^{きりだんす}：名古屋の桐箆は、約400年前の名古屋城築城のため、全国各地から集まった大工職人が定着し、箆製造にたずさわらようになったのが始まりといわれている。当地が、木曾材など木材の集散地であったこともあり、袋町・大須界隈の発展とともに産地が形成された。



写真 1-35 名古屋桐箆

名古屋黒紋付染：紋章は、平安時代に発生し牛車や衣服に付けられ、のちに武家の目印となった。現在は、紋章を付けた衣服は、礼装用となっている。名古屋の黒紋付染は、白生地を紋章の部分を残して黒で染め上げ、白く残した部分に紋章を描く。黒染めの工程で、紋型紙・紋当金網を用いる名古屋黒紋付染は、黒の美しさ、丈夫さで優れている。

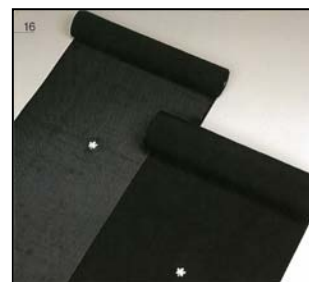


写真 1-36 名古屋黒紋付染

名古屋扇子：名古屋の扇子は、18 世紀の中頃に京都から現在の西区幅下あたりに移り住んだ父子によって始められたのがその起こりとされている。名古屋は京都と並ぶ産地として知られ、京扇子が婦人物を主としているのに対し、名古屋扇子は、白扇など男ものを主体として発展してきた。



写真 1-37 名古屋扇子

和蠟燭わろうそく：名古屋の和蠟燭は、17 世紀後半に会津地方から伝わったとされている。和蠟燭は、はぜ櫃の実を搾った木蠟とい草の芯、和紙を原料としており、植物性のため、洋蠟燭と比べ油煙が極めて少ない、風がふいても炎が消えにくいなどの特徴がある。また、灯芯のまわりに何回も塗り重ね太くしていくため、蠟燭の断面は、ちょうど木の年輪のようにになっている。



写真 1-38 和蠟燭

名古屋提灯：提灯の歴史は古く、遠く室町時代にさかのぼるといわれ、江戸時代には盆供養に提灯を使う風習が生まれ、盛んにつくられるようになった。名古屋提灯は、明治初期には貴重な輸出品としてもてはやされ、全国一の生産を誇った時期もあったといわれる。現在は、盆提灯、観光土産用（地張提灯）、お祭・神社仏閣・看板提灯などが多く生産されている。

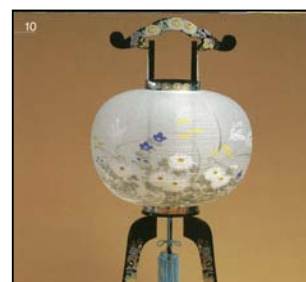


写真 1-39 名古屋提灯

この他、名古屋市内には、北区、守山区、緑区に江戸時代から明治時代にかけて創業した 5 軒の酒蔵があり、現在も酒造りを行っている。江戸時代以降、名古屋近郊で酒造りが盛んになると、多くが江戸に出荷され人気を集めたという。現在、市内の酒蔵には歴史的建造物が多く、伝統の酒造りとともに地域の歴史的景観を創出している。

④生活文化

(ア) 名古屋ことば

名古屋の「ことば」は他の地域の「ことば」と比べると、やわらかく、温かみがあり、相手に対して丁寧かつ上品でおおらかに聞こえる。また、江戸時代からの共通語や京言葉が今も多く使われていることが特徴である。

名古屋ことばは、上町言葉（上の言葉）、下の言葉と武家言葉から構成されている。このうち「上」とは、広小路通より北の碁盤割の町であり、「下」は広小路通の南側である大須、橋あたりを指す町といわれている。また、熱田には熱田弁（宮弁）なる独特の言葉もある。

名古屋ことばの特徴

- ①「さま(ちゃま)」がつく…おじさま、ねえさま、おっさま(和尚様)
- ②古語が生きている…お(措)いてちょうだやあ、米をか(浸・漸)してちょうだやあ
- ③京言葉が入っている…ようけ(余慶)、ぎょうさん(仰山)
- ④あそばせ言葉…ごまやあすばせ、いらやあすばせ
- ⑤武家言葉…ご無礼します、〇〇でござりまする

(イ) 食文化

7代藩主宗春の時代の資料からは、当時の名古屋の食べ物が豊かであった様子がうかがえる。京・大阪や江戸から入ってきた食べ物も多かったが、名古屋人好みの味付けが加えられて、この地の味となった。

代表的な名古屋の味としては、赤い豆味噌と溜り（醤油）がある。赤味噌仕立ての味噌汁は、名古屋ことばで「御味御付（おみおつけ）」などと呼ばれるが、これは室町時代の宮中の女房詞（にようぼうことば）からきた語である。現在、よく知られている味噌煮込みうどん、味噌おでん、味噌煮、土手鍋などは、甘い砂糖の入った練り味噌を使うもので、砂糖が日常化して以後の新しい食べ物と考えられている。



写真 1-40 きしめん

きしめんは、名古屋特有の食べ物であるが、いつ頃からあったかはよくわからない。守貞謾稿の『近世風俗志』には、「今世、江戸にて平打の温鈍を、ひもかとは号く…江戸にてひもかとは云う平打うどんを、尾の名古屋にてはきしめんと云うなり」とあって、江戸時代後半にはあったことがわかる。

尾張名古屋では、茶の湯とともに茶菓子も発展した。名古屋築城と同時期に

名古屋に店を開いたのは、初代藩主義直の尾張入府にともなう駿河越え商人の「桔梗屋」と大阪道修町からきた「両口屋」であった。「両口屋」は藩との結びつきも深く2代藩主光友から屋号を授かったという。江戸時代、藩御用達の御用菓子司は、藩の入手した砂糖を譲り受けて菓子を作っていたという。「桔梗屋」は明治末年にのれんを下ろしたが、この蒸し菓子法の流れを汲む「美濃忠」、「不老園」、「松川屋本店」などが、今も名古屋の茶菓子文化の一端を担っている。

なお、名古屋市蓬左文庫には、『御蒸菓子御見本』、『御干菓子御見本』のように江戸時代の菓子を描いた見本帳が残されており、当時の菓子の様子を知ることができる。

名古屋市民にとってなじみの深い菓子のひとつに「オコシモノ」（オコシモン、オシモン等）がある。オコシモノは、米の粉を熱湯で練り、鯛などの型を彫込んだ木型に押し込んでからはずし、蒸して作る。食紅や色粉で着色される。オコシモノは桃の節供に合わせて作られる。餅のように焼いて醤油などを付けて食べる。市販もされているが、家々に保管された木型を使い、家庭で作ることも少なくない。



写真 1-41 オコシモノ

名古屋市は、木曾の山々とそこから流れ出た木曾川などの河川、その河川が育んだ濃尾平野と豊かな海の恵みをもたらす伊勢湾に囲まれた大都市である。

そこに生きる人々の歴史は、台地の縁辺部に形成された集落に始まり、古墳や古窯、神社、城跡などに痕跡を残しながら積み重ねられてきた。

近世に入ると、天下を治めた徳川家康によって名古屋城が築かれ、名古屋城下町は、尾張藩における政治・経済・文化の中心地として繁栄した。ここによりやく現在の大都市名古屋の原型が姿を現した。

明治時代には、名古屋港の築港を契機に、古代よりこの地の拠点であった熱田が名古屋市と合併し、さらには、大正・昭和にかけて周辺地域が次々と名古屋市に編入され、旧城下町の外側で独自の文化を育んできた町や村が名古屋市の一部として一体的な歴史を歩み始めた。

大都市へと成長を遂げた名古屋市であったが、太平洋戦争では空襲により甚大な戦禍を被り、名古屋の歴史を受け継ぐ多くの人々の命と生活、名古屋城をはじめとする貴重な歴史的建造物が失われてしまった。

戦後、名古屋市は大胆な戦災復興計画を実行して、戦災からの復興と戦前を上回る発展を成し遂げ、日本を代表する大都市として現在に至っている。